

二之卷

泉鏡花

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

目次

莓

神婢

はなれ駒

留針

影法師

山鳩

\*\*\*\*\*

莓

ネツキスト、ネツキスト、ネツキスト、ネツキスト、ミリヤアドがやゝ口早に、順々質問を言送る、清き聲を聞きながら、夢地を辿る心地也。時々隣席の學友より、不意に注意を請くるにぞ、其度はツと我に返りて、さて慌しく其間に應ぜむとするに、質問の何なりしかを、うか／＼聞漏し居るなれば、更に答ふる術を知らず。心臆して問ひも返さず、唯面のみ赤うなり、黙して俯くこと頻なりし。

其日は學期の試験なるに、殊にこの一致教會に屬したる、東京の中央會堂より、宣教師一名、牧師一名、並に隨行員兩三名、折から巡教の途次わが校に立寄りて、生徒の成績を見むがため、此時教場に臨みたるなり。

豫め其通牒ありたることなれば、ミリヤアドは師の情として、生徒に晴を取らせたく、且つみづからも教師等に、おのが生徒の出來榮を、誇らむずる意もありたるより、二週間ばかり以前より、あはれ成績の好かれかした、組の者一統に、繰返し／＼其旨をぞ含ませたる。

特別に予を其家に招きつゝ、好き兒ぞ、かまへて仕損ずな、いと年少き御身の榮は、珍客に對するわが派手なり。あしき事にあらざれば、聊の私は、神も許したまふべしとて、今日われに試むべき、幾條の問題を、わらかじめ打明かしぬ。

記憶力は人に譲らじを、殊に一冊の會話篇より、難易取交ぜ抜き出して教へられたることなれば、心易くそらんじて、もの數ともせざりしに、富の市に罵られて、口惜さ、恥かしさの苦悶の枕に眠らざりし、昨夜の今日のことなるより、我にもあらで茫然と、あらぬことのみ思ひ續け、今おのが身のいかなる場所、何の時にあるかさへ、打忘れたるほどなれば、然は見苦しくも失敗して、はじめより一ツとして答へ得たるはなかりしなりけり。

頭重く、耳鳴りて、胸苦しき身を持て餘し、氣を取直す力も失せて、再び眠らぬ夢をぞ視たる。卓子の上をこと／＼と、三ツ四ツ忙しくたゞく、音して、妙なる薫の腦を刺すに、ふと心着きて、面を上ぐれば、ミリヤアド立ち居たり。名を呼ぶに應ぜざることの、度重りしに、渠は堪へで、予が前に來りしならむ。手にせる鉛筆の軸を返して、卓子を打ちて、驚かせしなり。

予を見たる目に怨を帯び、激せる顔を颯とあかめ、

『何をして、何をして！』  
と低聲に強く戒めぬ。客の臨める席なれば、仍たなくは得も叱らず、少しく聲をふるはせつも、一句の英語を予に語りぬ。  
蓋し國語に譯すべきなり。

予は其激したるを見てあわてたれば、さまで難解き語にもあらざりしを、行詰りて、（我に與へよ）といふまでは解せしが、語の題なる品物の名をいかにもして譯する能わず。恐怖と、慙愧の眼を以て、ミリヤアドの顔を瞻りしに、女教師は聲をひそめて、

『赤いもの、小さい、小さい。』  
と口早に教へてき。うてたき予を憐みたる、渠が心を汲み知りぬ。あせるに耳の熱くなるのみ、なほ答へかねて黙するにぞ、いひ効なしとミリヤアドの、もろともに急き込みつゝ、

『小さい、美しい、赤いもの、赤いもの、』  
（これほどの）と其形を示して、胸なるぼたんをつまさぐれり。人知れじとてしたらむが、來客も學生も齎しく此方に瞳を灌ぎて、なかには笑を含むもあるに、ミリヤアドはおもはゆげに、密とあたりをぞ 二したる。

予はおぼえずも聲を放ちで、

『根がけの球。』  
と我ながら調子はづれに答へたり。同時に、哄と笑聲起りぬ。

『ネツキスト！』  
と一聲鋭く、ミリヤアドは問を送りで、屹と予を見たる目の中に一滴の涙を湛へたり。予はふたゝび仰ぎ得ざりき。  
隣席なる富の市は、すましかへりて、

『毒を下さい!!』

とそを譯しつ。(すとるべりい)の語なりしよ。

神婢

「こら、新次、起きんか、お前の處へお客様だ。」

「誰です、父上、遊びに来たのなら断りませう。」

「む、起きるのが大儀かの。いや、其まんまで逢つたら可からう。油断のならねえ、おい、新姐が一人尋ねて来たんだ。は、乃公はまたおれの處へ来たのかと思つたら、大當はづれよ。は、は、は。」

と元氣よき高笑、兒の病をば慰めむとて、然は氣あつかひしたまふなるべし。  
予は半ば起返りぬ。

「え、女ツて誰でせう。」

「む、何よ、の、あの何の人さ。お前が學校へ行くはじめに、朋達がそれ耶蘇へ入つたが分らねえとかいつて、毎日道に待伏をして、苛めるつて、弱つて居たつけの。其時分から袖の下へ庇つちや、家まで送つて来てくれた、それあの束髪に結つた別嬪だ。な、白襟で。武家方の女中が御維新になつたといふ身の、凜とした、嫌味の無い。」

「あ、父上、それぢやミリヤアドの家に居る操さんといふ女でせう。」

「さうかな、まあそんな者だらう。何でも構ふことは無い、寝たまゝお目に懸るとするさ。」

良ありて枕頭に來りたるは、果して其人、操なりき。日曜學校の教師なれば、人あつかひはよく馴れたり。見るよりなつかしう笑ひかけて、はやわが額に手を加へ、忽ち眉を打擧めぬ。

「新さん、熱がございますね。お頭痛が？ 不可ませんねえ。學校へもおいでぢや無いさうだし、ミリヤアドがね、大變案じて居るのよ。御病氣は？」

「風邪だつて、」

操は頷き、

「ぢあ、まあ、ね。ですが夏の風邪はしつゝこうございますつさ。お醫者様は？」  
「大したことはないツて言ひます。」

「でも、折角お大事になさらずにツちや不可ませんよ。学校もおくれますわ。」

「僕は最う学校には行きません。」

操は豫て期したる如く、

「さあ、其事でね。實はミリヤアドの代に、私がお怨みに来たんだけれど、御病氣だから堪忍してあげませう。」  
「さあ、其事でね。實はミリヤアドの代に、私がお怨みに来たんだけれど、御病氣だから堪忍してあげませう。」

「ミリヤアドもね、新さん、学校をひいたのよ。何故ツて、何故ツて、新さん、あなたが餘りだからですわ。ミリヤアドが如彼見えても、宛然子どもなんですからね。こんど来た宣教師に、ひどく新さんのことを御自慢でね、ま、さんざ、お弟子の惚氣をいつたの。而して御目に懸けませう、御覽なさいでもつて、試験場へ連出して、こゝでといふ處で新さん、ま、貴下あの日は何うしたといふんですね、私が聞いてゝさへ口惜かつたわ。何をうつかりして在らつしやつたんだか知らないけれど、ちつとも身に染みて下さらないでさ、ものをいつても聞きつけもしないでせう。」

堪らなくなつたと見えて、傍へ行くと、貴下がまたひどくとちつてさ。どきまぎなさるんだものを、見て居ても、可哀相で私もはあ／＼思つて居たわ。ミリヤアドがまた夢中になつて、そつと遠廻に教へたでせう。御自分は氣が上づつてるから人に聞えないつもりでも、皆な聞いて居ますわね。それでなくツてさへ自分より年上の生徒にものをいはれると、いつでも恥かしがつて、紅くなる方ですもの。依怙鼻屑で、しかもねえ、試験といふのに教師の方から教へたんぢや、あとで顔があらはされますものですか。あの日歸つてから、新さん、貴下が折角の志を汲んで勉強をして下さらないツて一日泣いて居ましたつけがね、でも、何うぞ、あの日は貴下が病氣だつたのであつてくれゝばいゝ、ほんとにあんなにものがお出来なさらなくなつたんなら何うしようツて、さういつちや案じて居ますよ。」

操の手は逸早く予が口を蔽ひたれば、折から茶を汲みて來合せたまひし、父はさりとも心着かで、  
「新次、吸子ごと置いとくぞ。えゝ、お愛想もございませぬ。澁茶でもおあがんなさい。」

と無頓着に言ひすて、はや座を立たんとしたりしに、操は開きて、席を正して、

「貴下が新様の父上でございますか。もいたしません。あの、大層なお細工のお上手だつて、豫々人から承ります。早速でございますが、簪を一本打つて頂くわけには参りますまいか。」

「まめだちていひたるに、父はいゞふかしきおもゝちなりしが、極めてまじめに、

「へい、耶穌も簪をさしますか。」

「まあ。」

「また、御鼻屑に。」

と父は立ちぬ。操はといきつきて羞ぢたる色あり。

「まあ、新さん飛んだことをいつて、貴下をお泣かせ申してさ。間の悪い處へ父上がお出遊ばしたもんだから、つい場合を繕はうと思つて、心にも無いお世辭をいつて、あゝ、私、極が悪いわ。可うござんす、屹と打つて頂ますから。で、ね、ミリヤアドが自分で見舞に來たいんだけれど、どつちかといへば叱つてあげる筈なのを、此方から出かけて行く譯にはゆかないから、おまへ行つて見舞つて來て、而して新さんには、私が大層怒つて居るから、あやまつてまた遊びにおいでなさいと、然ういつて來て呉れるツて、ミリヤアドの言葉なの。そんなに貴下のことを思つて居るのですからね、學校のこととはもかくも、會堂へはあひかはらず入らつしやいよ、よ、可うござんすか。あれ男の癖に。」

枕の上につぶしたる、予が背を優しく搔いなでつゝ、

「新さん、御覽なさい、ね、ね、これを、貴下にあげますツさ。」

「早や黄昏の一室の内に、赤く、小さく、美しき、人の情のほの見ゆる、苺を装りたる一個の籠、添へたるミリヤアドの手紙にいふ――愛らしき學生よ、心して、再び此名を忘れなせそ――」



はなれ駒

橋の袂に屯したる一群の少年は、十六七を頭として六歳七歳八歳ばかりなるまで、棒を取り、礫を握り、或は砂利を掴みなどして、何をか口々に罵りつゝ、予が近寄るを待構ふ。

渠等は例の如く會堂より予が歸途に就くを要せるなり。

近隣なる竹馬の朋の、嘗て小學にありし時、席を同じうしたるやから、皆予が外人の教を受け基督教の會堂に通ふをば、忌み、且つ憎むこと一方ならず、面に唾せむ勢もて、影を望めば後を追ひ、姿を視れば路を塞ぎ、嘲罵の果は棒ちぎりの斷を加ふること常なるより、予も深く注意せしが、一月ばかり引籠りて、久しく外に出でざりしかば、忘るゝともなく油斷して、料らず渠等に出あひしなり。

予は進みかねてためらひき。

其と見るより口々に、

「腰拔やい、腰拔やい、新次の、新次の礫やい、此處まで来て見る上杉やい、耶蘇の新次の、馬鹿の、間拔の、弱蟲やい。」

言馴れたれば、唱歌の如く、いつもの文句を一同に節を付けてぞ囃しける。耳馴れては居たれども、さりとは口惜く、腕力あらばと思ふのみ。橋のこなたに立すくみて睨へ詰めたる横合の油屋小路といへるより、わつとばかりに呐喊を擧げて、ばら／＼と七八人、驚破と見る間に突あたりて、どんと無體に突飛しぬ。

予はたじ／＼とよるめきつゝ、こは後よりまはりしぞ、前なる敵と引挟みていかなる憂目を見せむも知れじと、はつと思へる眼を遮り、危ふくも鼻頭を掠めて、木もて造れる持遊びの薙刀の刃の閃きしを、纒にはづして身を交し、右手に掴みて力まかせにハツばかりの兒の持ちたりける、其薙刀をひつたくれば、聲を揚げて泣出せり。

「やあ、三ちゃんを、泣かした／＼。」

「なぐツちまへ磔め。」

「畜生。」

と聲鋭く、誰にかありけむ、いと長き竹杖以て、滅多なぐりに打おろすを、目も眩れながら思はず、眉間のあたりに受留めたる獲物はもろくもホツキと折れたり。

吻と氣落せる前後よりひた／＼と寄せ合うて、左右を圍みて取巻きつゝ、じり／＼と詰寄るにぞ、手も足もぐる／＼と呪詛の繩に縛られて、しめつけらるゝ心地して身動もせで突立つたる、舌硬ばり、唾かわき、拳を握りてわなゝきつも、助欲しくて見返りたる、元來し方に鱗爪の音、人こそありけれ、ミリヤアドが、三歳駒の逞しきに、横鞍にぞ乗つたりける。裳の裾長く踵を埋めて、垂れて地摺になるばかり、薄色の日曜服、川風に颯と靡き、たをやかなる身の軽く、雲に乗るかと思ひ、もの靜にぞ打つたりける。

「やあ、女唐めだ、女唐が來た、來やがつた／＼。」

少年等の聲々や、予は忽ちにあびせられぬ、拳のあられ、砂の雨。剩さへ丸太に足をすくはれて、横だふれになつたる身は、冷き衣に包まれて、温き手に抱かれぬ。ミリヤアドの汗を絞りて、さも悲げに呼ぶ聲せしが、俄に凄じきものおとして、やゝありてひっそとなりぬ。

眼をひらけば蝙蝠一羽、橋の欄干より衝とあらはれて、ひら／＼と柳にかくれ、瀬の色白く、蛇籠暗き、此方の岸を五人、おめき叫んで疾走する、むかひの岸なる放れ駒の砂烟を立て、かけゆくを、川を隔て、追懸け行く、川上なる山の端に、薄月出で、暗かりき。

ミリヤアドの送別は、其住居にて、いと内端に、世を憚りて開かれき。先の日、予が少年等に苦められしを救はんとて、當時乗りすてたる渠の乗馬の、雨の如くなりし礫に驚かされしを、取鎮むべきミリヤアドの手は、予を庇ふため塞りたれば、したゝか狂ひて離れ去る時、端なくも一人の小兒の、遁後れたるを蹴放して、憂ふべき怪我を被らせぬ。

被害者の親は善き人にて、さまで苦情を言はざりしかど、外教を憎む者の、然るべき制裁を加へむなど、團體を造りて騒ぎたれば、然らぬだに心弱きミリヤアドの、おのが不注意を悔い恨み、人の不幸を哀傷して、一室に閉籠りて、掌に面を蔽ひては卓子にうつむきて、神に祈を捧ぐるのみ。食の細るまでわびたるにぞ、恚て久しからむには、其健康もいかなるべき。且や、心なき怨を受けて非難の衝にあつた、身の上も憂慮はしく、郷黨の怒解けざれば、布教の上にも害あらむ。かたゝ身を退くこそ萬全の策なるべけれど、人のすゝめにミリヤアドの、さはとて旅装を整へて、前日來逗留したる、宣教師の一行が、東都に引返すに連立ちて、上京すべく定めしなれば、世の聞えを憚りて、慎ましげにたゝむとせしなり。

客はいと多かりし。

年來布教に盡瘁せし其には何の効もなきに、せめては名残を惜まれむを、胸狭き人々のために、幾分か、否、豈幾分のみならむや、市民に對する教會の徳望は殆ど地におつるばかりなりなど、座の一方に嘯くありて、憐むべき、ミリヤアドを難ずる者少なからず。

さらぬは不運を弔するのみ、渠を祝するものあらざるにぞ、ミリヤアドも悄乎として客に肩身の狭げなりし、失意の身には誰がせしぞや。

ことの起は予なるものを、と予はものいふさへ控目に、唯人顔のニされき。  
富の市もまた座にありしが、一言をも交さざる、予をいかにして聞着けむ。

「や、君。」

といひながら嘯く如く空を仰ぎ、

「近頃は何うして居ますね、時計屋へも来ないやうぢやが、はゝゝゝ、何うだね、ちと私在家へ遊びに来なさらんか。金曜日は午後から隙だからね。」

予はきゝもあへず席をはづしつ。ミリヤアドが化粧の室の冷たき椅子にたふれかゝりて、  
(金曜日は隙だからね、)  
と繰返しつゝ切齒をしたる、蟲齒の急にうづき出でゝ、忍びがたくなやみにき。

「おや、新さん。」

外の方より、操はつか／＼と入来れり。入るより予が状を見て取りて、

「何うしたの、え、何かお氣に入らないことがあつたんぢやないの。ミリヤアドが尋ねて居ました。彼の方も可哀相ですよ。せめて新さんが機嫌のいゝ顔を見せて、快くたゝしてあげて下さいな、ね、此方へ入らつしやい。お嫌、何故？ え、齒が疼むの、そりや不可ませんね、あゝ、嗽をなさると可い、水を持つて来てあげませう。」

氣輕に出でゝ行く、引違へて、ミリヤアド入り来りぬ。

「齒が疼むツて。さう？」

其身も疼むかの如く、眉根を寄せて身震ひしながら、髪にさしたる留針を抜き取りて、予が頤に手をかけつゝ、むかひの壁にかゝりたる姿見を仰がせて、

「口を、口を。」

といたはりいふ。

「あゝ。」

とばかり指の先もて、疼痛を示して齒を開きぬ。

「甘いものをたべるから、坊や、世話をやかすこと。」

ミリヤアドは呟きて、水の如き腫を寄せ、眉根を皺めて顰みつゝ、針の尖もて齒のうるを危げに穿りくれしが、

「治りませう、大丈夫。」

と微笑みながら、桃色の絹の手巾に、針の尖をつと通して押拭へるを、予が着たる、衣もの襟に縫着けたり。

「あげませう、これ、また疼む時。」

齒はいえぬ。されども胸のいたかりけり。

「さあ、新さん。」

時に操は硝子杯を手にして、引返し、背後より肩越に、差寄する水を含む時、渠は予が肩に兩手をかけて、斜に彼方に推

向けつゝ、

「あなた。」

といひて目を合せぬ。

ミリヤアドは面をそむけて、衝とのきざまに差のばしたる、寶石輝く右手の指に、予は唇を觸れたりき、鳩毒をあふぐ時、仙薬を嘗むる時、いづれか其時のおもひに似たる。

唯散步とのみいひこしらへ、十一時すぎ十二時頃、もの狂はしく家を出で、深水の前を二度三度行返りして來らでは、寐られぬ病に罹りたり。

去ぬる夜、富の市に胸の秘ごとを發かれしより、獨り恥ぢて氣の咎むれば、再び行かむが面伏なるに、分けて學びの道すさびて、學校も退きたるを、富の市の口よりして、秀に、はた其母に、いひつけたらむと思ふにぞ、ます／＼われは怯氣つきぬ。

店に人目のありと思へば、宵の内は其居まはりにも足を運ぶことをせず、初夜すぎ人の寐ねてのちを、然は密にぞ通ひしなる。

はじめのうちは予が父も、もの好とのみ見許せしが、雨降りても、風吹きても、缺かさず出づるに疑ひかゝりて、果は夜遊を禁じたまへり。

時刻來れば胸苦しく、起居に我身を持餘しつも、心を悶えて忍びしが、ミリヤアドに別れてよりは、いかにしても堪へずなりぬ。

父は風邪ひきて早寐をせし、寐いきをはかりて外に出で、唯見れば月のありともなく、またあらずとも思はれざる、時雨あがりの空一面に灰汁を流せる如くなり。折から動物の形したる、一團の黒雲のむら／＼と湧き出でしが、濡れたる地に影を映して、恐しと思ふ間に、塵も留めず消去りき。こは我門を出でたる時なり。

覺束なくも行き／＼て彼の大通の四角に懸れる時、眞闇なる人家の軒下より颯と音たて、宙に飛びて、予が足許に落ちたるものあり。立停るに、ものあらで、一足二足行くさきへ、またさら／＼と、さら／＼と予を導くとする如く、三間ばかりともなひしが、怪しとも怪しきに、耳傾くれば山おろしの、そよ／＼と渡るにぞ、さては木の葉よと心着くに、其音は忽ちやみて、毛筋も動かず風死にぬ。

あまりあたりの寂なるに、人は咎めねど下駄の音の重く響くを憚りて、脱ぎて、手に提げて、素足となりけり。

左よ、右よ、此度はまた左よ、歩行の順、正しく胸に覚えつゝ、兩側の家の墨繪に似たる、町中を辿り／＼て、やがて深水の店近き、少しく此方に歩をやすめぬ。

やゝ心の落着くに、不圖時間を考ふれば、密に家を出でしより、幾時ばかり過ぎたりけむ、思へば久しき心地のするに、予は太く驚きぬ。

急ぎ再び歩を移して、さきにもいへりし深水のむかひの唐物店の前に着く。

時に一天墨を流して、いつのほどにか、我が姿の見分かざるまで闇となりぬ。ト見れば背後なる瓦斯燈の、近くは一尺、末廣がりに十間ばかり、彼方にては町の幅一杯に、遠くなるほど蔓りて、軒を越し、屋根に這ひ、遙か彼方の通のはづれの、酒屋の藏を蔽うたる、嫗が松の梢にて、朦朧として消え失する、一道の火影によりて、莫大なる影法師のやゝ其長さに達するまで、さやかにぞ描き出されたる。歩を進むるに従ひて、頭は殆ど我居る方より半町餘も隔りたる、其松の木に登るまで、凄まじく、長うなるに、悚然としてかほをそむけし、深水の二階の四間の障子に、赤黒き火影ニと射す。呵呀と一足退れるトタン、障子の上一杯に、大なる人の天窓と、鼻と、唇と、横に向きたる顔の影の、さとうつりてぞ見えたりける。



富とみの市いちよ！ と思おもふと同時どうじに、げら／＼と高笑たかわらひの、左さ右いうの耳みみへ二ふたツの口くちもて兩方りやうほうより推込おしこむやうに聞きえしにぞ、あとさ  
けびたるあとは覺おぼえず。臥床ふしどにわれは心こころづきぬ。外あまてにはどう／＼と凄まじき大雨たいうこんぢく坤軸こんぢくを降ふり静しづめて、恰あたかも瀧たきを落おすが如ごとく、  
寝着ねまきは絞しぼるが如ごとくなりき。汗あせか、あらぬか、霰しゆくや、否いなや。

十二月十日、ミリヤアドより手紙來れり。予に東京に來れといふ。嘗て別を惜みし時、然はわれ彼の地に着きて後、身の振方落着きて、居に安んずるものならば、直ちに汝を招くべきに、笈を荷ひて後より來よ。成業の曉までは、食を別けても扶助せむなど、細々言を交へたる、其約を違へずして、今かく報知をぞ寄せしなりける。

少年の血氣盛にて、功名心の燃ゆる頃の、予はいかにしてかたゆたふべき、固より父も許したり。其日にも發程むとせしが、心引かるゝは秀なりき。

將棊のことありしより、心ばかりは寢覺にも通ひたれど、其横顔を見ざること、三月四月に早やなりぬ。わけて、幻か夢かを分たず。恐しかりし夜の影法師より、夜毎にあくがれし足も留みぬ。たゞ懐しさはかはらぬを、都にのぼり果てむには、幾年を経てかまた逢はるべき。あはれ叱らるればそれまでよ、一たび名残を惜までやとはと、思ふ心の切なるより、きまりの悪さも打忘れ、東都へ遊學すといふをかこつけに、疎かりし足を激ましつゝ、消入るばかりの思ひにて、行くことは行きたれど、なほたやすくは入りかねて、半時餘もためらひしが、一足づゝ小陰を出でゝ、次第に深水の前に近づき、店なる洋燈の光のうちに、わが顔見えつと、ぎよツとして、衝と行きすぎて立戻れる、身は宙にある何かの手以て、引立てらるゝやうに覺えて、呵呀、心着けば予は既に椅子に腰かけて俯向き居たり。

親しさは變らざりき。

友吉は見るよりも、仰山なる聲を擧げぬ。

「よう　これは妙？　不思議、奇的烈といふお入來だ。新ちゃん、恐しいお見限でございましたね。何うしてお見えなさらないうらう、御病氣か不知、それとも學校がおいそがしいか不知、とまづはじめの内はおうはさで、なかごろは

お案じで、此頃ぢやお奥でもつて怨んで居ますぜ。可い所へいらつしやいましたよ。今ね、ちやうど秀さんも母さんも、お女中連不殘湯に行きました。いまにお歸だからお待ちなさい。ほんたうに留守の内だから可うございました。

何でも今度いらつしやつたら、さん／＼怨みをいふ、と秀さんが大意氣込でお出ですからね、突然ぶつからうもんなら面くらつておしまひなさる處、友吉が一番御鼻肩効といふので裏切つてしやべります。まあ落着いて何でも其のうまく言譯の出来るやうに今の内考へてお置きなさいまし。可うございますか。

お待ちなさい、それとも先んずれば人を制すで、かうやつてト函のうらへ隠れて居て、友さん唯今と来る處を、ばあゝ、といつて驚かしは何うでせう。え、新ちゃん、しばらく逢はないで居て、久しぶりで顔を合すのに、たゞぢや榮えますまい。

何か一趣向ありさうなもんですね。お待ちなさい。ばあも馬鹿げてはおもしろからず、ト仰向に寝て居るも變なものだし、入らつしやい！と此方からいつて見るか。それも道化て居て、新ちゃんではまりが悪いな、お待ちなさい、いや、かうこじれちや思案にあたはず、さすがの友的大弱。何ぞおもしろいことありませんか。」と新聞を取り上げて、三の面を覗きながら、

「はゝゝゝ、ゐざりが駈け出すといふ標題がある。ちと御覽なさいまし。」

とん／＼と二つ三つ下駄の齒の雪を打あてゝ、入口に落す音、中戸を開くる響するに、予は新聞もてわが顔の隠るゝやうにぞ読み居たる。

時計函の背後より、

「唯今。」

と懸けたる聲、引緊むる如く身に沁みぬ。

「そりやこそ。」

友吉は仰山に、

「秀さん、新ちゃんが。」

「さう！」

堪らずあげたる熱き顔を、秀は見より莞爾と笑みしが、軽く會釋して奥に入りぬ。

「あれだ。」

友吉は首をすくめ、

「ね、新ちゃん、だから私がさういつたんでさ。おい、金どん、一寸奥へ行つて斥候といふのを一番、是非こりや敵を知

つた上でないと、謀計のめぐらしやうがない。おい／＼

金どん／＼　これ！」

「おつとしよ。」

小僧は居睡りたるが、しやちこばつて、背のびをして、裾は膝までまくしあがり、諸脛長く踏揃へて藪から棒に突立ちけり。

友吉は呆れ顔、

「何だ、そりや、おい、金。」

と背をひとつくらはせば、ぐしやりと坐りて、

「へい。」

といふ。氣のなき返事に欠伸をまげて目やにを掻いたるをかしさに、思はず笑を催す時、

「友さん。」

とまた呼びかけながら、秀は奥より立出づる。

「店のね、皆が湯に行つておいでなさいツて、母上様が。寒いから、ゆつくりね。」

友吉は頭をさげ、

「それでは、お頼み申しませうか。」

「あゝ、店には私が居てあげようから。而してもう片付けてね。」

「はい、では、然ういたしませう、金どん。」

「お嬢様、え、何ですか。はい、お歸んなさい。」

「何だ、これ、寝惚けなさんな。」

二人は店の洋燈を消し、臺洋燈のみ一つ残して、椅子をひき込め、火鉢をいけ、硝子戸をはたとさして、手つ取ばやに片付けて、

「ぢや、行つて参ります。」

「さあ／＼。」

と出だし遣りつ。

頭を斜に火鉢に凭りて、指以て縁を叩き居たる、予の前に、中腰になりたる秀の、火箸に兩手をかざしつゝ、微笑む顔を視めしが、やゝ含みたる音調もて、

「新ちゃん、しばらくね。」

「といひたるが、懐しかりしといふ心の籠りしやうにぞ聞えたる。秀はまた、

「もしかすると御病氣で、こんどお目に懸る時は痩せてもおいでぢやないかと、皆でお案じ申してね。今も道々母様とさういつて來たの。美津もねえ。」

「おや、新ちゃん。入らつしやいまし。御機嫌よう、お嬢様。」

「美津かい、かまはないで、さあ／＼、暖かにして寝ないと悪いよ。」

「いえ、もうたいしたことではございません。」

「でもさ。」

「ありがたう存じます。あの、おゆつくり。」

「お大事に。」

「はい。」

と立つ。

「風邪なの。」

「急にお寒い故なのでせう。あゝ、新ちゃん、お寒くはございませんか。」

「いゝえ。」

「まあ、おあたり遊ばせよ。父上様は？」

「息災です。」

顔と顔との其のあはひの、あまり近きにいきぐるしく、おもきものにてわが頭をおさるゝやうに心に感じ、ふと横むきて片隅の冷たき板戸を望むとて、一羽山鳩の翼をひろげて、嘴を開きたるを飾りつけたる、一個大形の柱時計を、今日新らしくみいだしぬ。こは先の日にはなかりしものなり。

「おもしろい時計があるのね。」

「さう／＼、新ちゃんはまだ知らなかつたのね。來らつしやつたらお見せ申さうと思つて待つてたの。あの鳩がね、時間の前になると、ひとりでに鳴きますからおもしろうござんすよ。」

「鳴きますつて、あの鳩が。」

「えゝと、まだ時間にはならないのかねえ。二十分、まだ十一時にまがあるのね。それでは、と秀は立ちて、むかうむきに時計に對し、

「聞いておいでなさいませよ、ようござんすか。」

手をふるれば、文字盤の長劍動きて、

「あら！」

鳩は鳴けり。

予は衝と秀に立寄りたり。

「不思議だ。其木で拵へたのが鳴くのか不知。」

頻に頭を傾けて、予は其の聲を異なりとせり。

「ほかに何んな鳥も居やしませんよ。」

「だつて可笑いな。」

「そりや器械ですもの、ぜんまいで、ちゃんと、かう鳴くやうに、しかけをしてあるんですつて。」

「ぢや、もう一度鳴かして。」

「それではね、あなた背後むいて、目をつぶつておいでなさいよ。」

「何故ね。」

秀は然も、ものありげに、

「さうでない二度めには鳴きません。」

「變だな。かう」

「さうやつて、さうやつて。可うござんすか、目をおつぶりなすつて？」  
いひつゝ忍音に笑ひしが、鳩はまたしばなきぬ。

「はてな。」

「新ちやん、おもしろうござんせう。妙ね。」

「妙ぢやないや、分つた。口でいふんだ、鳩の眞似をするんぢやないか。」

「私ですつて？」

「少し含聲で」

似てるものを。」

「酷いねえ。私が何うしてあんなに旨く眞似られますものですか。」

「それだつても、はじめの時はあつちを向いて居てお鳴かせだし、こんだは目を塞がせて鳴かしたんだもの。」

「それは何も私の方で眞似をするんぢやありませんけれど、鳩がね、然うしないと、鳴くのがいやだつて、いふんですもの。」

「なに、あんな木でこさへたものが。」

「でも聲を出すくらゐですから。」

「そんなら鳩に、然う貴女から、目を塞がないで鳴けとおつしやい。さうすりや、ぼんとなのか、嘘なのか、確な處が分るんだ。」

秀は頷きて時計に向ひ、

「鳩や、新ちやんがね、お前をおうたぐり遊ばすから、可いかい、其まんまで鳴いておくれ、よ後生だから。」  
鳩はまた鳴きぬ。鳴く時、秀はうつむきて故に其口許をば兩袖をもて打蔽ひぬ。



「あら！ またあんな怪しいことを。僕はいやだ。」

「ほゝゝゝ、何故え？ 鳴いたではありませんか。」

「だつて口を隠したから怪しい、やっぱり自分で真似たんだ。」

真顔になれば、えみ傾け、

「これはね、口のうちで呪文をいふの。何うして術でもつかはなけりや木の鳩が鳴きますものか。」

「そりや呪文なら可いけれど、自分でいふんだから仕やうがない。何てツても、もういけない、誰がほんとにするもの

か。

「あれ疑深い、まあ。ぢや、ちやうど一分絶つと鳴きますやうに針をまはして置いてね、私がすわりますから。あなた私

の口をお壓へなすつていらつしやいな。」

「可いかい。」

「可うこさんすとも。」

「かまはないの。」

「さ。」

熾ゆるが如きわが耳に、冷たき秀の鬢觸れて、後毛のぬれたるが、左の頬を掠むる時、わが胸は渠が肩にておされぬ。襟あしの白きことよ。掌は其温き唇を早や蔽うたり。雪は戸越に降りしきる。

【二の巻・完】